

かっぱ通信



11月 NOVEMBER

～くもんは進度が上がっているときに学力がつき、復習をしているときに頭がよくなり、無駄のない学習法です～

学力はスピードではかかる

公文式の復習とは、先に進んでから苦労しないためのくり返し学習のことをいう。「だいたいわかっている」ことを、「本當によくわかりスラスラできる」ようになるまで練習させる。

一般に「復習」というと、できない問題をやり直すことという受けとり方をする人が多いようだ。しかし、子どもが「苦手だなあ」と思っている箇所を何度も何度もさせることは、子どもに心理的な負担を感じさせるだけで効果はうすい。それより、「これならやれる」と思うようなところで、しっかりと力を養ってやることだ。

運動会の駆けっこで時折ころぶ子どもがいる。その子は何の前兆もなくて突然ころぶわけではない。注意深く観察していれば、手と足の動きがアンバランスになったり、アゴが上がったり、足がもつれたり、必ず何らかの“危険信号”を見せている。まだころんではいなくても、走りつづけることにアップアップで「苦しいよお」という訴えが伝わってくるものだ。

駆けっここの場合は、それでも、フラフラしながらもなんとかゴールにたどりつくことができる。それは距離がそんなに長くないこと、一時的ながんばりで事がすむことによる。算数・数学の道のりは運動会の駆けっここの比ではない。その長い道程を無理なく楽しく歩ききるためにには、先手先手の復習が決め手になる。ころんでもから大慌てで復習させるのは上手な指導とはいえない。ころぶ前に、少しでも足どりがおかしくなったら、思いきって復習をさせる。ころんでもからでは子どもは復習を負担に感じるが、その前の段階のくり返しは嫌がらないし、最初にやったときよりらくに解けるからむしろ喜んでやるものだ。

もちろん復習回数にも個人差はある。たとえば鉄棒やマット運動など、先生からお手本を示されてすぐにやれる子どももいれば、10回以上も練習しなければならない子どももいる。その子にはそれだけの練習量が必要なのだ。

10月の教室日

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 30 | 31 | | | | | |

10日 スポーツの日

11月の教室日

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| 27 | 28 | 29 | 30 | | | |

3日 文化の日 23日 勤労感謝の日



つわぶき

連絡事項 ◆教室休み 11/29(火)

- ① 【受信許可設定をお願いします】A:教室連絡用 rsu74650@nifty.com (3件まで登録可)
B:お知らせ専用 k-info@kumonmail.jp (送信専用)
- ② 【駐車場】教室の駐車場は敷地内と隣接のくもん看板のある駐車場です。長時間の待機はお控えいただきお知らせメールでの連絡を受けてからのお迎えにどうかご協力ください。
- ③ 【いつでもご相談ください】 教室前にZoomでも教室でも面談実施中
学習を上手に続けられるヒントが教室にはあります。もやもやしたら早めの相談を！
お悩みをメモやメールでお知らせいただければこちらからお電話いたします。



「くもん国道」でも検索できます。

公文式くもん牛久教室 火曜・金曜 15時~21時 前田
電話 029-871-8441 携帯 090-8502-4561

メール rsu74650@nifty.com

ご相談は教室日以外でもお気軽にどうぞ。

☆教室HP更新中♪ブログや写真で教室の様子を紹介

6+3ができるようになった子どもが、8+6ができるようになるまでの練習量にはずいぶんの個人差がある。ある子どもは、できる子どもの3倍も5倍もかかる。

5倍かかる子どもは、やはり5倍かけないですというわけにはいかないのである。

公文式では100点をとっても復習をさせるのですか、と質問されることがある。多くの親にとって、100点をとるということはその段階の実力が十分についていることだと思えるのだろう。しかし、100点の内容にもピンからキリまである。必死にがんばってやっととった100点もあれば、余裕しゃくしゃく、サッと解いてとった100点もある。その段階に限ってみると、どちらの100点でも構わないかもしれない。むしろ、がんばって100点をとった子どもを「えらいね」とほめてやることもできる。だが、いつまでもそんながんばりを要求していいものだろうか。

子どもは次々と高い段階に登っていかなければならない。問題の難度はどんどん増していく。必死にがんばって100点をとった子を、じゃあ今度はここよ、次はここよ、と尻を叩くように進ませたら、きっと息切れしてしまうだろう。

ビルの段階に踊り場があるのは、途中で息をつけるようにという配慮もあるのではないかと私は考えている。どんなに健脚を誇るつわ者でも、果てしなく長い階段が一直線につづいていたら、さすがにうんざりしてしまうのではないだろうか。

つねに余力のある進め方をしてやりたいと公文式では考えている。たとえ100点ばかりでも、先に進ませて大丈夫だろうかと気にかかるような点があれば、ためらうことなく必要なだけの復習をさせるのである。

「公文式創始者・公文公（くもんとおる）」